広島平和記念公園におけるランドスケープデザイン

丹下健三による構想の変遷

THE LANDSCAPE DESIGN IN HIROSHIMA PEACE MEMORIAL PARK

The transition of the design by Kenzo Tange

真木利江^{*1}, 新畑朋子^{*2}

Rie MAKI and Tomoko NIIHATA

This paper aims to shed light on the transition and characteristics of the landscape design by Kenzo Tange in Hiroshima Peace Memorial Park. We examined the proposals he made during two periods (1949-1955 and 1970-1973), and clarified the transition of his treatment of the principal axis oriented north and south through the park. We also attempted to show that the contrast between southern part and northern part of the central hourglass shaped stretch was designed to both commemorate the victims of the atomic bomb and promote peace.

Keywords : Hiroshima Peace Memorial Park, Kenzo Tange, Landscape Design

広島平和記念公園, 丹下健三, ランドスケープデザイン

1. はじめに

本稿は、丹下健三（以下、丹下）らによって提案・設計された広島平和記念公園におけるランドスケープデザイン^{注1)}の特徴とその変遷を明らかにすることを目的としている。

被爆後間もない1946年、戦災復興院の委嘱を受けた調査のために来広して以降、丹下らによる広島における都市計画・建築設計に関する活動については、広島市の他、石丸や千代により、史料研究・聞き取り調査を含め既に詳細な研究が蓄積されている^{1)・注2)}。また、1949年「広島平和記念公園」競技設計において示された丹下らの案は、平和記念大通りの東西軸と原爆ドームを起点とする南北軸が直交する構想が広く知られており、その中心施設である平和会館（現在の平和記念資料館）^{注3)}は、戦後の建築を代表する作品として高く評価されている（図1参照）。平和記念公園全体の造形についても、藤森らにより、南北の中心軸をめぐって、都市と建築の接続、平和記念アーチと鼓型による動的な構成、場によるモニュメンタリティの創出等が、先行する作品群との比較を含めて検討されている^{2)・注4)}。しかし、植栽計画を含めた公園自体のランドスケープデザインを主題化する先行研究は存在しない。本稿では、南北の中心軸による構成については、藤森による指摘を参照し、植栽計画という新たな観点を加えて広島平和記念公園の構想を分析し、総合的なランドスケープデザインとしてこれを捉え直す。

平和記念公園の建築群は、終戦直後の資金・物資不足の中で建設

され、1955年に完成するが、公園の整備は広島市によって実施される。戦後25年を迎える1970年には、不十分な計画・実施、経年劣化による荒廃が見られる一方で、公園の重要性が高まっており、世界平和の聖地として相応しい姿となるよう、丹下らによって『広島平和記念公園基本整備計画』（以下、『整備計画』）が作成されている^{注5)}。また、これに関連して1973年『広島市公会堂及びその附属施設の改造計画の策定に関する調査報告書』（以下、『調査報告書』）がまとめられた^{注6)}。広島市の平和文化都市としてのあり方に対する提案や、建物の改修・新築はその後が続くが、公園全体に対するまとまった提案はこれらが最後のものとなっており^{注7)}、これら1970年代の提案はこれまで研究対象として十分に主題化されていない。

本稿では1949年の競技設計応募案から1973年までの時期を対象に、丹下による植栽計画を含めたランドスケープデザインの特徴とその変遷を明らかにする。また、平和記念公園の構成の要である南北の中心軸とランドスケープデザインの関係、広島平和記念公園の主題である平和記念と慰霊の表現について考察を加える。

Fig.1 Model of the Peace Center Project (1950)

^{*1} 広島女学院大学 准教授・博士(工学)

^{*2} パシフィックコンサルタンツ(株) 技術士 [建設部門] (都市及び地方計画)

Assoc. Prof., Hiroshima Jogakuin Univ., Dr.Eng.
Pacific Consultants Co., Ltd., P.E.Jp

2. 研究方法

丹下らによる広島平和記念公園のランドスケープデザインを、1949年の競技設計から1955年の平和会館竣工に至る時期と、1970年『整備計画』と1973年の『調査報告書』が作成された時期の2つの時期に区分し、分析・考察を進める。対象は、雑誌や作品集に発表された図面及び説明文、広島市公文書館に所蔵されている丹下関連資料とし、まず各時期に関して本稿が扱う資料を示す。

2-1. 1949年から1955年までにに関する資料

競技設計への応募図面は1949年11月『建築雑誌』において発表され、配置図・鳥瞰図・平面図の3点が掲載されるが^{注8)}、その後の作品発表ではこれらの図版は使用されない。広島市公文書館に雑誌掲載図より解像度の高い図面写真が2組現存している(図2, 3)^{注9)}。

その後、1950年3月頃までに石膏模型が制作され(図1, 4)^{注10)}、さらに広島平和記念公園の北、広島城を含む基町地区と呼ばれる一帯を含めた広がりに対する広島平和総合公園計画(以下、総合公園計画)がまとめられた^{注11)}。模型写真及び総合公園計画の図面が、1950年6月中旬までに作成された英字パンフレット『Peace City Hiroshima』^{注12)}、1950年8月号『新都市』^{注13)}、同10月号『国際建築』^{注14)}、1954年1月号『新建築』^{注15)}で発表されている。『新建築』には1951年第8回CIAMでの発表内容も含まれ、当時の作品発表として最もまとまったものである。総合公園計画は広域の図面で、模型よりも表現が簡略化されているが、模型の公園の姿と概ね一致している。この模型写真が各雑誌で競技設計応募案として紹介されているが、建物配置や植栽は応募図面から変化している^{注16)}。

最終的な実施と、競技設計・雑誌発表の提案との最大の違いは、平和記念アーチの取りやめである。1954年『新建築』での発表時には、既に丹下による慰霊碑が1952年8月に竣工していたが、公園全体に関する掲載図版は『国際建築』等と同じものとなっている。一方で、後に作品集として出版される1966年『現実と創造：丹下健三1946-1958』^{注17)}、1980年『現代の建築家 丹下健三』^{注18)}、2002年『丹下健三』^{注19)}には、丹下の慰霊碑^{注20)}が実施された形で描かれた公園の図面が収められている(図5)。作品集ではこの図面は1950年とされているが、1952年以降のものと推定される。園地に関しては総合公園計画以前とも実施されたものとも異なっており、正確な年代は不明であるが本稿では1952年の公園平面図として扱う^{注21)}。

1949年から1955年のランドスケープについて、第3章では競技設計応募案、1950年の模型および総合公園計画での案、1952年の公園平面図それぞれについて検討する。各雑誌の作品説明に関しては当該所収図面にのみに対応するものではないため、図版と対応させて検討する。また、ランドスケープデザインを担当した大谷幸夫へのインタビュー記事も参照する^{注22)}。この他、1949年11月から1951年6月にかけての、丹下から広島市に宛てられた書簡が現存し、当時の経緯を断片的に知ることができる^{注23)}。

2-2. 1970年代の資料

園地整備は広島市により実施されるが、1955年に出版された『概観 広島市史』に公園の概略図が収められている(図7)^{注24)}。図面の正確な作成時期は不明であるが、実施された園路構成等とはば一致しており実施前後に作成されたものと考えられる。1955年以降、1960年代にも、公園整備は断続的に続く。

1970年の『整備計画』は3章立て27頁に、11枚の図面が付され

ている。冒頭で報告書の趣旨が記され、整備の考え方と方向性が諸建物について4点、公園について3点にまとめられている。諸建物については①慰霊碑は原形をとどめつつ整備・改造、②資料館〔陳列館〕の徹底的改修、③記念館〔本館〕の資料館〔陳列館〕への用途変更、④公会堂とホテル^{注25)}の建替、公園については①資料館〔陳列館〕前の広場の改善、②原爆ドーム広場の改善、③平和公園の意義を高める提案である^{注26)}。本稿では公園についての具体的な提案を扱うが、後に、諸建物に関する提案のほとんどが実現するのに対して、公園に対する主要な提案は実現していない。この報告書の3年後に作成された『調査報告書』は、『整備計画』の諸建物に対する提案のうち④公会堂とホテルに関する計画を具体化したもので、建築図面の他、公園全体の配置図と模型が作成されている(図9)^{注27)}。

第4章では広島市による園地整備の実施と平和記念公園の変化の概要を確認し、1970年『整備計画』を中心に、1973年『調査報告書』を参照して、当時のランドスケープに関する提案を検討する。

3. 1949年から1955年までのランドスケープ構想

競技設計の応募における方針を、丹下は『新建築』において次の3点にまとめている。第一は、南北と東西の基本的な軸線に沿った全体配置と、動線に関する事柄で、都市計画的な考え方についてである。第二が、4つの施設配置(平和会館、広場、祈りの場、原爆ドーム^{注28)})とアプローチの考え方で、約2万人が平和会館のピロティを通して広場へ入ること、その先のアーチと真下の慰霊碑^{注29)}、原爆ドームへの眺めについても触れられる。ここで慰霊碑と原爆ドームの間には「規則的に植樹された地帯があり、遺跡が露わになることを防ぐためのスクリーンとなっている」とされている。第三が造園計画であり、4つの施設を「自然なおおらかな環境の中に包むことであって、凡ゆる小細工は避けねばならない」とされる^{注30)}。競技設計の募集要項において、造園に関しては造園、苑路、広場、植樹の設計と針葉・広葉樹の区別が求められており^{注31)}、全体の方針の中で造園についての文言は比較的多いが、「規則的に植樹された地帯」の他は、具体的な植栽計画について論じられていない。

3-1. 競技設計応募図面

図2, 3に競技設計応募時の配置図と鳥瞰図(部分)を示す。公園の植栽は中心軸上で明瞭な幾何学的構成を見せる鼓型と、緩やかに屈曲する園路で構成される東西の一帯が対照的に扱われている。凡例では、樹木が4種に描き分けられている。広葉樹の落葉と常緑、針葉樹として杉と松である。広葉樹2種の描き分けは明瞭でないが、公園全体を、前庭を含む鼓型南、鼓型北、鼓型の東、鼓型の西の4つのエリアに区分し、関連する説明を確認しながら構成を読み解いていく。

鼓型南：鼓型南は平和記念大通りから慰霊碑までの一帯で、平和記念公園への最も重要なアプローチに当たる。大通りとの間は常緑樹で境界づけられ、前庭には左右に駐車場がとられ、東西一列に並ぶ平和会館の足下には舗装が施されている。陳列館の北は一面の芝生広場とされている。4つのエリアで最も明快な構成をもつ。平和記念アーチと、その頂点下に設けられた、円形に掘り込まれ方形の平板が設けられた慰霊碑が、鼓型北との境界をなしている(図3参照)。
鼓型北：鼓型北は、一面の芝生に細い樹木がグリッド状に植栽されている。図面では凡例として「針葉樹 杉」とされ、図面には「刈込

糸杉」と記されている。この植栽が、当時、惨事の記憶と直接結びついていた原爆ドームに対する「スクリーン」として説明されており、丹下自身、この針葉樹は「できるだけ細いのにして、その間から、ドームが木の上に見えるように計画」したとしている^{注32)}。糸杉は欧米では広く公園等に植樹される樹種であるが、墓地に植えられる樹木としても知られている^{注33)}。大谷幸夫はこの「針葉樹」を「死者の墓標」としてグリッド状に計画したと語っている^{注34)}。

中心軸上の道と、両側の糸杉に沿った小径が設けられている他、元安橋から本川橋へ斜めに横断する小径が設けられている^{注35)}。

鼓型の東：東側の一帯は、川沿い北から公衆便所、休憩所、野外陳列場が配され、本館の北西にも公衆便所が設けられており、複雑な構成を見せるエリアになっている^{注36)}。屈曲する小径もやや複雑な構成を見せるが、植栽とあわせてみると、主に南北の3つの小径により構成されているといえる。

まず鼓型の東側に沿って、緩やかに屈曲する小径が南北に伸びており、その両側は木立で閉ざされている。樹木の大小が組み合わせられ、公衆便所周りにも植栽されていることから、この小径では、常緑樹の中の散策が意図されていると考えられる。また南から北への散策では、北端部で眺めがひらけ、正面に両側の樹木で縁取られた原爆ドームを望むよう植栽されている（図2中の白丸）。

その東には本館から野外陳列場まで南北に直線状の小径が延びており、凡例による描き分けは不明瞭であるが、季節によって表情を変える落葉広葉樹であると推測される^{注37)}。

元安川沿いの道には、公園内で唯一松が植えられており、松越しに元安川と対岸を望む風景が用意されている。

鼓型の西：鼓型の西には鼓型の東と同様に、南北にゆるやかに屈曲

する、常緑樹で視界が閉ざされた小径が設けられており、この道でも、北端近くの2カ所で原爆ドームへの眺めが用意されている。鼓型北を北東から南西へ斜めに横断する直線状の小径が、本川橋近くでおおきく屈曲し、公会堂を経て、南北に伸びる常緑樹の小径に連続する。川沿いには車道が設けられており、両側は落葉広葉樹の並木であると思われる^{注38)}。また、この車道に沿って南北に細い小径が設けられている。公衆便所が公会堂の北に設けられている他は建築もなく、東側に比べるとゆったりとした構成となっている。

3-2. 模型と総合公園計画図面

図4に当時の『国際建築』『新建築』において、競技設計応募案として紹介されている模型写真を示す。まず、競技設計時に比べ、樹木の表現が大幅に簡略化され抽象化されている。4種に描き分けられていた樹木は、鼓型北のみが円錐形の針葉樹として、その他は広葉樹として扱われている。それぞれに大きさは一律となり、針葉樹は小さく広葉樹はヴォリュームのある表現で統一され、針葉樹と広葉樹の対比に表現の焦点が置かれている。直線道の両側の並木表現は、総合公園計画の図面では、他の広葉樹の表現と統一され、広葉樹は全体に、より曖昧な表現となっている。

競技設計時の野外陳列場は、ロの字型の慰霊室に変更され、この北に位置する公衆便所が残されているが^{注39)}、その他の公衆便所、休憩所は取り除かれている。園路構成は競技設計応募時からほぼ変化しておらず、常緑樹による鼓型の強調、原爆ドームへの眺めの開き方などは、応募時ほど明瞭ではないものの継承されている^{注40)}。

3-3. 1952年の公園平面図

1952年の図面（図5）では、取りやめとなった平和記念アーチと円形の慰霊碑が、実現した慰霊碑の姿で描かれ、アーチ東側足下の

Fig.2 Plan proposed in 1949

Fig.3 An aerial view of the central part of the proposed park

Fig.4 Model of the Peace Center Project

慰霊室、公衆便所が取り除かれ、園路にも変化が見られる。

まず、鼓型北の中心軸上の一帯が、南北に連なる4つに分割された区画に変更されている。この区画は図面では空白として描かれているが、後の広島市による公園の概略図で同位置に描かれる花壇と形状が類似しており、花壇であると思われる^{注41)}。また、鼓型南は慰霊碑に向かって緩やかに下る斜面として描かれ、慰霊碑前に階段が設けられている^{注42)}。

園路構成にも変化が見られる。鼓型北では、広がり斜めに横切っていた細い小径は太い直線道になり、これまで見られなかった小径が複数加えられている他、鼓型の東西の園路構成も変化している。鼓型北に加えられた南北方向の小径は、被爆前の生活道をなぞったものとも考えられるが、その他の小径の変更については明瞭な意図を読み取ることが難しい^{注43)}。

3-4. 考察

競技設計応募時には、鼓型南には芝生広場が、鼓型北には針葉樹のグリッド状植栽が施され、東西の一帯は常緑樹が鼓型を強調するとともに市街との境界をなしていた。また、東西の川沿いには落葉樹や松並木が用意されることで、公園における散策に多様な体験が用意されていた。1950年の模型と総合公園計画では、このうち鼓型東西部の詳細な設計が捨象され、表現の焦点が鼓型の広がり置かれた。これらが応募案として発表されていることから、鼓型の広がりあくまでランドスケープの中心であり、東西の一帯は東側にやや重点が置かれているものの、背景として構想されていたと言える。1952年以降の図面にも同様の構成が見られるが、鼓型北における中心軸上の構成は、公園全体の園路構成ともに、意図が不明瞭なものへ変化していた。ここでは、南北の中心軸の変化と、平和記念と慰霊の表現について考察を加える。

見えない軸から見られる軸へ：これまで平和記念公園における南北軸は、平和記念大通りから原爆ドームまでの広がり、中心軸上に配された陳列館のピロティと平和記念アーチという2つの空隙的な要素が緩やかに境界づけつつ連続させる構成に、丹下の独自性が指摘されてきた。また、軸上に眺めの焦点として現れる要素は原爆ドームのみであり、緩やかに連ねられた場の様態が、量塊的な存在に頼らないモニュメンタリティの創出として、高く評価されている^{注44)}。競技設計応募案、模型と総合公園計画で、これら見えない軸を

中心に緩やかに場が連なる構成を確認することができる。

一方で1952年の図面では、丹下の慰霊碑とその北の中心軸上に花壇と思われる区画が描かれていた。丹下の慰霊碑は中心軸上にあって公園全体の中で眺めの焦点となる存在であるが、優しく軽やかで空隙的な形態は、原爆ドームへの眺めとともに高く評価されている^{注45)}。慰霊碑を額縁として原爆ドームを望む際に近景に現れるのが、慰霊碑北に連なる花壇である。周辺の疎林や小径とは異なる要素として描かれている点は、これが意識されたものと考えられ、競技設計応募案、模型と総合公園計画にみられた、見えない軸が場を緩やかに束ねる軸構成が、鼓型北において眺められる軸へと変化する転換点として捉えることができる。

この変化は、全体構成の中で大きな意味をもつものであるが、その一方で、慰霊碑のすぐ北側も、4つの区画を画している複数の道も、人々が横断することができ、原爆ドームへの眺めが十分に検討されているとはいえない。つまり、この時点では、軸に対する考え方は、十分に整理され検討されていないように見受けられる。

この不明瞭な軸構成の転換の理由を、実現することがなかったイサム・ノグチの慰霊碑案が示唆しているように思われる。高さ5mで圧倒的な存在感をもつイサム・ノグチ案は、量塊としての強い表現をもつ(図6)^{注46)}。アーチ状であるものの、原爆ドームを十分に望むことができないことが指摘されているが、丹下はこれを「おおらかな気宇が溢れている」として、その実現に尽力していた^{注47)}。これは当時の丹下にとって、中心軸上の眺めそのものが特別に重要ではなかったことを意味しており、存在感の強い彫刻としての慰霊碑が、鼓型中央にあって広がり束ねるという構想をもっていた可能性を指摘することができる^{注48)}。

平和記念アーチからの変更、イサム・ノグチ案からの変更において、全体構成における中心軸の扱いに、迷いのようなゆらぎを見ることができる。

平和記念と慰霊の南北対比：広島平和記念公園の競技設計要項には慰霊に関する施設が含まれていない。丹下らはこの場が「平和をつくりだす工場」であるべきとして、未来の社会と平和に強い焦点をあてる一方で、慰霊は「ささやかな碑」において「平和の祈り」を捧げることとし、中心軸上の平和記念アーチ頂点下に慰霊碑を設計していた^{注49)}。しかし、当時の設計説明では触れられないものの、「死

Fig.5 1952 plan

Fig.6 Cenotaph proposed by Isamu Noguchi

Fig.8 Aerial photograph, 1965

者の墓標」^{注50)}として糸杉をグリッド状に植栽した鼓型北の一帯は、慰霊の場として構想されているといえる。

鼓型南に積極的な平和記念・創造を支える平和会館と広場が配される一方で、鼓型北には疎林越しに見え隠れする原爆ドームを望む風景の広がり慰霊のランドスケープが具体化されているといえる。また、広場を中心に多くの人々が集う鼓型南に対して、鼓型北は個人または少人数での散策が可能な広がりとして、慰霊の場が構想されている。

この南北の対比が、丹下らによって語られない理由の一つに、競技設計時には慰霊を主題化することが難しい占領下にあったことが挙げられるだろう。しかし、この疎林は1950年以降、図面や説明文において記念植樹として記されるようになり、その後もこれが墓地空間を連想させる糸杉であったことについては触れられることがない。その理由は不明であるが、平和公園における南の平和記念・創造と北の慰霊という構想が、公園内で完結する閉ざされた対比的な図式として捉えられることを懸念した可能性を指摘することができる。平和記念公園の中心軸は原爆ドームの北に広がる基町地区の未来へも展開しており、公園内にとどまらない開かれた軸として構想されているからである。

4. 1970年代の提案

ここではまず広島市によって実施された公園の姿とその後の変化の概要、1970年代の丹下による提案について確認し、前章と同様に中心軸及び平和記念と慰霊の表現という観点から考察を加える。

4-1. 広島市による実施とその後の変化

図7に広島市により実施された公園の概略図を示す。丹下らによる提案からの最大の変化は、鼓型北のグリッド状の植栽が取りやめになった点である。慰霊碑北、中心軸上の花壇両側には樹木が並び、さらにその両側の広がり、鼓型東西の植栽と連続する構成に変更された^{注51)}。これにより、鼓型北における慰霊のための広がりのある風景は完全に失われることになる。

1957年、慰霊碑の3方を取り囲むように幅2mの平和の池が建設される^{注52)}。1964年には丹下の設計により、核兵器が地上から姿を消すまで灯がともされる平和の灯が建設され、これに合わせて平和の池が中心軸上に幅17m、長さ70mに延長された^{注53)}。また、公園内への慰霊碑の設置が進み、資料館〔陳列館〕南の中心軸上に、1960年嵐の中の母子像、1964年に噴水池が設けられた^{注54)}。1966年には原爆ドームの永久保存を市議会が決議している他、1967年に平和記念公園内に新たな慰霊碑の設置を行わない方針が決定されている^{注55)}。図8に1965年の航空写真を示す。

実施における植栽の変更理由は不明であるが、まず戦後の物資不足の中、植栽の多くを供木に頼らざるを得ず、樹種に関しては選択肢がなかった可能性が高いと思われる^{注56)}。グリッド状の配置については管理に対する懸念が示された可能性、墓標としての植栽という考え方自体が否定された可能性が指摘できる。丹下は1963年に公園に緑が増え、記念碑や彫刻の設置が進むことで、市民にとって親しみやすい姿に変化していることを評価している^{注57)}。草木が育つこと自体が不安視されていた当時であって、丹下らの仕事の重点は建築設計に置かれ、植栽に関する変更について、当時は大きな意見の対立がなかった可能性も指摘できる^{注58)}。

4-2. 1970年代の提案

1970年の『整備計画』で、公園に関する整備の考え方は①資料館〔陳列館〕前の広場の改善、②原爆ドーム広場の改善、③平和公園の意義を高める提案の3点であったが、具体的な提案は6項目挙げられている。(1)爆心地の地図を復元する計画、(2)平和の池の延長、(3)原爆ドーム広場の整備、(4)記念館、資料館〔陳列館〕、公会堂以南の計画、(5)市民の休憩施設などの整備、(6)その他の整備事項である。①に(4)が、②に(3)が、③に(1)、(2)、(5)、(6)が対応している。

ここでは、図9に1973年『調査報告書』に収められている配置図を示し、主要な提案である(1)(2)と、(3)、(4)、(5)、(6)のうち全体計画に関わる項目について内容を確認し考察を加える^{注59)}。

最大の提案は(1)爆心地の地図の復元で、鼓型南北の広がり全体に、被爆前の各戸の境界を示す舗装を施し、被爆前の地図を復元するというものである。各戸の境界線は棒石であるが、鼓型北では境界線の中は小舗石程度の石として樹木を残し、鼓型南は規格寸法の石の敷並べとしている^{注60)}。関連する項目として、この舗装工事と同時に鼓型南の南底辺部を平和記念大通りから1.4m立ち上げ、慰霊碑に向かって緩やかに下る斜面とすることが(4)で提案されている。(2)は平和の池を元安川まで延長して流れ込む形とし、中心軸上の対岸、原爆ドームの足下に船着き場を設けるものである。(3)では原爆ドーム周辺を芝生広場として整えることが、(5)では休憩所の設置と元安川沿いの遊歩道が、(6)では公園内の記念碑類の廃止・移設、鼓型北を斜めに横切る道について車の通行禁止または車道撤去等が提案されている^{注61)}。また、1970年の『整備計画』では触れられないが1973年『調査報告書』では、平和記念大通りの南側の中心軸上に高層の平和ビルが計画されている。

4-3. 考察

見えない軸と見られる軸の変容：1964年の平和の灯設置と平和の池

Fig.9 Plan proposed in the 1970's

の延長によって、慰霊碑からの眺めは、両側を樹木で境界づけられた水面と平和の灯の先に原爆ドームが縁取られる、より軸線自体が明瞭に表現された構成として確定していた。一方で、鼓型北は、既に疎林としての独立した広がりを持っていた。

1970年代、鼓型北にグリッド状ではないものの、再度、疎林としての広がり提案されている。ここに復元地図による舗装が鼓型南と連続することで、失われていた鼓型の広がり回復が目指されている。しかし、鼓型北の広がり、平和の池とその両側の細い樹木による密な列植により東西に分断されており、中心軸上のモニュメンタルな水面に、より表現の焦点が置かれているといえる。

中心軸上には南から平和ビル、母子像、噴水池、資料館〔陳列館〕、広場、慰霊碑、延長された平和の池、平和の灯、原爆ドームが点在・連続する。資料館〔陳列館〕南には量塊的な表現をもつ要素が点在するものの、鼓型南においては、資料館のピロティが平和大通りから慰霊碑までの広がり、画しながら連続させる、見えない軸としての構想が継承されている。一方で、鼓型北では、疎林の広がり、再提案されているものの、眺められる対象であるモニュメンタルな水面が、見られる軸としてより強調された姿で提案されている。

丹下による慰霊碑の設置、平和の池の延長と平和の灯の設置を経て、1949年に示された中心軸による構想は、鼓型南の見えない軸と、鼓型北の見られる軸が対照的な姿を示すことになったといえる。

平和記念と慰霊の重ね合わせ：1970年に提案されている計画の中心は、鼓型における地図の復元である。この被爆の記憶を可視化するという提案は、丹下自身の発想によるものでなく、1966年8月以降、急速に展開した爆心復元運動に関連すると考えられる^{注62)}。被爆事実の風化に対する懸念を背景として、当時の平和記念公園に被爆の事実を想起させる手がかりがないことに疑問が示されていた。

1968年、この運動の企画提案者である長屋龍人が、平和記念公園の芝生広場に、核時代の踏み絵として復元地図を銅板として埋め込むというアイデアを丹下に伝えている。銅板にはすべての家と亡骸の位置が彫り込まれ、これを踏むことが道義的に許されないため、慰霊碑へ迂回する行為が促されるという提案であった^{注63)}。この復元地図は、個々の被災をそれぞれの場所に定着させることで人と場所をつなぐ表現として、また、地図を通して死者と生者、体験者と非体験者をつなぐ表現として構想されており、丹下が強い関心を示したことが記されている。

丹下はこのアイデアを芝生広場のみでなく、鼓型全体に適用し、かつ、この被爆地図が復元された鼓型の広がり、その上を歩むべきではない場所としてではなく、人々が集い、また散策する場所として提案している。

丹下はこの提案について次のように記している。「しかしここには、平和公園の創造の精神が、現代に生きづく証となって我々の前に広がっている。／当時の姿が復元されるこの広場に立つて、人々は何を考へるであろうか。／それは人様々なものがある。唯、だれしも思う事は、創造に結びつくものを、いつまでも持ちつづけたいと思うことにちがいない」^{注64)}。丹下による地図の復元案は、被爆による破壊の跡を、眺めや歩みの中に直接に体験できるものであるが、そこに広がるのは、あくまで「平和公園の創造の精神」であり、誰もが「創造」への希望を抱く風景なのだ。

競技設計時に示されていた、人々が集う鼓型南の平和記念と、個々

の散策・体験を通した鼓型北の慰霊という図式は、継承される一方で、復元地図がもつ過去と現在、個人と社会、人と場所をつなぐ構築力によって、平和記念と慰霊を鼓型全体に重ね合わせた姿として描き出しているといえる。鼓型北の構成の中心をなす中心軸上の眺め、慰霊碑から平和の池、平和の灯、そして原爆ドームを望む眺めの中にも、両者が重ね合わされていると理解していただろう。

5. おわりに

丹下らによる平和記念公園のランドスケープデザインを、1949年から1955年までと1970年代の2つの時期について具体的に明らかにし、中心軸の変容と、平和記念と慰霊のランドスケープについて考察を加えた。

競技設計応募時に示された、緩やかに場を束ねる南北の中心軸の構想が、平和記念アーチの取りやめに伴ってゆらぎを見せ、1970年代には、鼓型南では場を束ねる見えない軸の構想が継承される一方で、鼓型北では軸自体のモニュメンタルな存在が眺められる対象として強調された姿で描き出されていた。

平和記念公園の主題である平和記念と慰霊は、競技設計応募時には鼓型南の平和記念・創造と、鼓型北の慰霊として捉えることができ、これまで語られてこなかった慰霊のランドスケープを明らかにすることができた。1970年代の提案では、鼓型全体に復元される被爆地図において、平和記念と慰霊が重層する構成へと変化していた。

今後は、平和記念公園の現在の園地・植栽における、丹下らの構想の継承の様態等について報告したい。

謝辞

本稿の執筆に当たり、広島市都市整備局緑化推進部より資料閲覧の機会と情報提供を頂いた。記して謝意を表す。

参考文献

- 1) Hiroshima Urbanism Workshop ed.: Reconstruction of Hiroshima: pictorial history of forty years since atomic bombing, Hiroshima-shi, 1985 (in Japanese)
広島都市生活研究会編：都市の復興、広島被爆40年史、広島市企画調整局文化担当、1985
- 2) Kenzo Tange and Terunobu Fujumori: Kenzo Tange, Shinkenchiku-sha, 2002 (in Japanese)
丹下健三、藤森照信著：丹下健三、新建築社、2002

注

- 注1) ランドスケープデザインという用語は1980年代以降に、都市計画、建築、環境、土木等の分野を横断するようなカテゴリーとして日本で広く使用されるようになる。本稿が対象とする時期には、公園設計は造園と呼ばれているが、丹下らによる公園全体に対する構想の内容に照らして、本稿では植栽計画を含み、建築設計および都市計画とも接続可能な公園全体の設計という意味でランドスケープデザインという用語を使用する。日本におけるランドスケープデザインという用語の受容と史的展開、隣接分野との関係、造園との相違については次の著作が詳しい。／宮城俊作：ランドスケープデザインの視座、学芸出版社、2001／また、近年のランドスケープデザインの課題と展望をまとめたものとして次の特集が挙げられる。／菅博嗣、仲隆裕編：特集・ランドスケープデザインの新たな地平、ランドスケープ研究、日本造園学会、66(1)、2002.8、pp.1-31
- 注2) 広島の後復興における広島平和記念公園の位置づけについては参考文献1および次の文献が詳しい。／震災復興事業誌編集研究会、広島市都市整備局都市整備部区画整理課編：震災復興事業誌、広島市都市整備局都市整備部区画整理課、1995／広島における戦後の都市計画と丹下健三

- については石丸紀興らによる貴重な研究が多数蓄積されている。／石丸紀興，李明，岡河貢：広島復興都市計画と丹下健三：広島における建築家丹下健三の活動に関する研究 その1，日本建築学会計画系論文集，第67巻，第557号，pp. 339-345，2002. 7他。／基町地区を含む丹下の構想に関しては，千代章一郎：丹下健三による「広島平和公園計画」の構想過程，日本建築学会計画系論文集，第78巻，第693号，pp. 2409-2416，2013. 11
- 注3) 各施設の名称は，図面・説明文において細かく変化するため，本稿では，戦後の提案に関しては，3棟全体を平和会館，西棟を公会堂，中央棟を陳列館，東棟を本館と統一して表記する。図1はこれに対応させるが，各図版への施設名称の加筆は各図版に記載の名称とし，本文中の名称を[]内に示す。／1955開館当時の条例上の名称は中央棟が広島平和記念資料館，東棟が広島平和記念館で，後述の1970年代の提案では，中央棟を資料館〔陳列館〕，東棟を記念館〔本館〕と表記する。また，原爆ドーム，平和記念大通りについても，これらに表記を統一する。
- 注4) 丹下に関する著作は多数出版されているが，広島平和記念公園の造形に関する最もまとまった論考が含まれる著作として参考文献2，とくに「第7章 広島ピースセンター」pp. 129-169。また，丹下の関係者へのインタビューをまとめた著作として，豊川斎赫編：丹下健三 Kenzo Tange，オーム社，2013。広島の関連図版が網羅的に所収されているものとして佐藤竜馬，今瀧哲之，名塚雅絵編：丹下健三：伝統と創造：瀬戸内から世界へ，美術出版社，2013が挙げられる。
- 注5) 丹下健三＋都市・建築設計研究所『広島平和記念公園基本整備計画』，1970. 2，広島市公文書館所蔵。内容については後述。
- 注6) 丹下健三＋都市・建築設計研究所『広島市公会堂及びその付属施設の改造計画の策定に関する調査報告書』，1973. 1，広島市公文書館所蔵。内容については後述。
- 注7) 1970年の『整備計画』の次にまとめられる，広島平和記念公園に関する整備計画は，1989年3月『平和記念公園再整備計画』であるが，広島市によれば，この作成に丹下には関わっていない。1970年代以降の丹下と広島の関わりとしては，平和記念大通りが中心的に取り上げられた1979年1月『広島国際平和文化都市基本構想』が作成されている（1978年4月の中間報告書も現存し，いずれも広島市公文書館所蔵）。また建築設計に関しては『新建築』1989年7月号で「広島国際会議場」，同誌2002年8月号で「国立広島原爆死没者追悼平和記念館」が作品発表されている他，改修等での関わりは継続している。
- 注8) 丹下健三，浅田孝，大谷幸夫，木村徳国：広島市平和記念公園及び記念館競技設計等選圖案1等，建築雑誌，第64輯，第756号 pp. 40-43，1949. 11
- 注9) 図面写真は，『建築雑誌』掲載の配置図，鳥瞰図，平面図の3点で，藤本千万太資料の「広島平和公園競技設計応募作品」（C1993 841）と，銀山匡助資料の「平和公園計画図」（C1993 471）の2組が所蔵されている。後者には配置図・鳥瞰図の右下にK. TANGEの押印があり，写真範囲がやや広い。図面の原本は見つかっていないとされている。
- 注10) 次の論文で模型の制作は1950年3月15日開幕の神戸博（正式名称「日本貿易産業博覧会」）への出展が直接のきっかけとされている。／中川利国：＜資料解説＞「丹下健三書簡綴」（藤本千万太資料）について-広島市公文書館所蔵資料との関係を中心として-，広島市公文書館紀要，第27号，pp. 58-51(1-8)，2014. 6。／また，模型の縮尺は1950年3月30日，丹下健三発，藤本千万太宛書簡で1/300と記されているが，先行研究では1/200として紹介されている。模型写真は計5点が建築雑誌等で使用される。
- 注11) 作品集及び雑誌により，このほか平和公園計画，広島平和都市建設構想案等の名称が使用されている。総合公園計画に関しては1950年の市による複写と思われる図面が，広島市公文書館に複数点所蔵されている。
- 注12) 広島市公文書館所蔵。この英文パンフレットは市長・県知事の海外出張に合わせて制作されたと考えられている（前掲，注10，中川）。
- 注13) 丹下健三：平和都市建設の中心課題，新都市，第4巻，第8号，広島平和都市建設特輯号，pp. 14-17，1950. 8／図版は模型写真のみ掲載。
- 注14) 丹下健三，浅田孝，大谷幸夫：広島計画 平和都市の建設，国際建築，17(4)，pp. 27-39，1950. 10
- 注15) 丹下健三：広島計画（1946-1953）とくにその平和会館の建設過程，新建築，pp. 1-17，1954. 1
- 注16) 競技設計応募時の図面写真（中7）の存在は広く紹介されていないため，先行研究においては，当時の雑誌発表に倣い，模型写真が競技設計応募時の提案として扱われることが多い。
- 注17) 丹下健三，川添登編著：現実と創造：丹下健三 1946-1958，美術出版

- 社，1966
- 注18) 丹下健三，SD編集部編：現代の建築家 丹下健三，鹿島出版会，1980
- 注19) 参考文献2
- 注20) 広島市平和推進課：原爆関係の慰霊碑等の概要（中区），2016. 3。正式名称は広島平和都市記念碑で原爆死没者慰霊碑とも呼ばれている。本稿では慰霊碑と統一して表記する。
- 注21) また図版資料として，1950年11月付けの園路・建物位置決定に関する配置検討図が現存し，この図面には当時のバラックの位置が描かれている。／Seng Kuan and Yukio Lippit ed.：Kenzo Tange：architecture for the world，Lars Müller Publishers，2012，p33／この図面を対象に，軸構成の分析が報告されている。石丸紀興：広島平和記念公園コンペにおいて入選した丹下健三グループ案の軸線構成とその意味に関する研究，日本建築学会中国支部研究報告集，第38巻，pp. 921-924，2015. 3
- 注22) 藤本照信，大谷幸夫：戦後モダニズム建築の軌跡・丹下健三とその時代「平和をつくる工場」という考えに，モダンな思想を感じました 第1回 大谷幸夫(1)，新建築，pp. 83-90，1998. 1／大谷幸夫，初田香成，砂本文彦，菊池薫：建築家は平和に，広島にどう向き合ったか：平和都市建設の思想，建築雑誌，127(1635)，pp. 8-11，2012. 8
- 注23) 丹下が広島市関係者に宛てた23点の書簡で，同文書館により翻刻が公開されている。＜翻刻＞「丹下健三書簡綴」（藤本千万太資料）について：広島市公文書館紀要，第27号，pp. 9-27，2014. 6
- 注24) 広島市史編集委員会編：概観 広島市史，広島市，1955
- 注25) 戦後，公会堂は国庫補助が得られず，地元の設計事務所により，ホテルと一体化した建物として1955年に竣工した。現在の広島国際会議場。
- 注26) 『整備計画』の章立ては次の通り。広島平和記念公園及び諸施設の整備改善（3～5頁）／建物の改修改善（6～20頁）／公園の整備改善（21～27頁）。図面は公園の基本整備計画平面図が2枚，平和記念大通り沿いの外構が2枚，資料館・記念館図面が3枚，慰霊碑設計図が4枚であるが，いずれも縮小複写されて収められており鮮明でない。
- 注27) 『調査報告書』は「その1」～「その3」の3冊子からなる。「その1」が全体の趣旨と改造案1（図面10枚，既存建物の主要構造部をそのままとする案），「その2」が改造案2（図面16枚，実質的な建替案で，延べ床面積は案1の2倍以上），「その3」が現状図面である。公園全体の配置図と模型は改造案2で作成されている。本稿では図9において，公園に関しては『整備計画』とほぼ同一内容であり，より鮮明・詳細な『調査報告書』の配置図を示す。
- 注28) 1950年頃には原爆ドームという名称が通称になっていたとされるが，1950年代，丹下らは「原爆の遺跡」と呼んでいる。丹下は1950年の『新都市』において保存が決定したと記述しているが，原爆ドームの永久保存決定は1966年である。
- 注29) 本文中では「慰霊堂」となっているが，平和記念アーチ頂点下の地点を指しており，競技設計応募図面，模型，総合公園計画において描かれる円形に掘り込まれ，平板の設置された場所を，本稿では競技設計応募図面に従って「慰霊碑」と統一して表記する。慰霊碑・慰霊堂・慰霊室については丹下による説明文にも混乱が見られる。関連して注49。
- 注30) 前掲，注15『新建築』より引用。『建築雑誌』『新都市』の説明にもほぼ同じ内容が含まれる。『新都市』から明確に項目立てられ，第3項に関連して「造園計画はその時すでに決定しているように思われた」という記述があるが詳細は不明である。また，第4項として建築に関する説明がある等，項目立てや表現の詳細が異なっている。
- 注31) 広島平和記念公園及び記念館設計懸賞募集要項，建築雑誌，1949. 5，p32。募集要項の変遷については次の論文が詳しい。／頼原澄子：原爆ドーム保存の過程に関する考察 1945年-1952年，日本建築学会計画計論文集，第70巻，596号，pp. 229-234，2005. 10
- 注32) 藤森照信：＜講演会＞広島計画を展開した意図・その後の丹下氏の活動，広島市公文書館紀要，第23号，pp. 41-67，2000. 3
- 注33) 上原敏二：実験造園樹木，養賢堂，1927／サイプレス類
- 注34) 前掲，注22，建築雑誌，p10
- 注35) この斜めの道はかつての西国街道であり，丹下は「広島銀座だった道」と表現している。丹下健三，藤森照信，松葉一清：焼け野原から情報化都市を駆けぬけて，建築雑誌，101(1242)，pp. 18-23，1986. 1／また，大谷はこの道のため針葉樹の配置決定が難しく，「全体を性格づける大きな通路と細道を全く別の原理で無関係に描いて，合成」という方法で解決したとしている。前掲，注22，新建築，p87
- 注36) 野外陳列場の一帯は独立壁によりいくつかの場所に区分され，休憩所と一体的に設計されており，鳥瞰図でも確認することができる。

注37) 図中に「○並木」と記されているが、冒頭の1文字は判別できない。

注38) 図中に2カ所「○並木」と記されているが、冒頭の1文字は判別できない。鳥瞰図で、本館と野外陳列場の間の「○並木」と異なる樹形で描かれており、樹種は異なると思われる。

注39) 総合公園計画で公衆便所を確認できるが、模型写真では判別が難しい。

注40) このほかに競技設計応募時からの変化としては、元安橋の角度変更、敷地南東の橋の取りやめがあげられる。

また1950年の配置検討図(前掲、注20、*Kenzō Tang*)には、主要園路の園路幅が、4種の寸法で明記されている。丹下は、陳列館の階高である6,498mmを主調とする社会的尺度と、踊り場の階高である2,482mmを主調とする人間の尺度との対位により、平和会館を構成したとしている(前掲、注15、p11)。園路幅は、10,514mm, 8,506mm, 6,498mm, 2,482mmが当てられており、園路に建築で検討していた尺度を敷衍しようと試みていたことを確認できる。

注41) 二重線で囲われた表現、全体の比例はほぼ同一であるが、広島市による公園の概略図では花壇の凡例が明示され5つに区画されている(図7参照)。広島市による園地整備の実施については後述。

注42) 直接的な関係は不明であるが、丹下は1950年5月27日の書簡で、イサム・ノグチの提案として、芝生広場を北に下る斜面とし鼓型中央の立ち上がり部に舞台のようなものを作る案をスケッチ付きで紹介している。

注43) 競技設計応募図面以降、丹下の図面では常に公園全体が計画可能な姿で描かれているが、1946年には敷地北端に当たる慈仙寺鼻に原爆供養塔が建設されていた。その一方で1958年の式典までは敷地内には民家が残っていた(参考文献1、pp. 92-96)。植栽や園路の整備は、立ち退き等の状況を踏まえて進んでいたと考えられ、これに対応させて変化した可能性も考えられる。被爆前と現在の地図が重ね合わされた図版が参考文献1に収められている。当時のバラックの位置については注21。

注44) 参考文献2

注45) 参考文献2他

注46) 慰霊碑の高さについては前掲、注32、p53。また大谷幸夫はイサム・ノグチ案を「僕には死者の胸からはらわたを引きずり出しているように見えた。・・・被爆した市民や死者の生きながらのもだえを直接表現している」としている。前掲、注22、建築雑誌、p9。／一方で、広島でイサム・ノグチ案が実現していれば、20世紀を代表するモニュメントになっただろうという評価も多くある。ドウス昌代：イサム・ノグチ 宿命の越境者 下、講談社、2002、p. 124 他。

注47) 前掲、注15、p14

注48) 丹下の慰霊碑は、現在、原爆ドームへの方向性が卓越するが、1954年の記念式典においても、丹下の慰霊碑に対して東西南北いずれからも人々が臨んでおり、原爆ドームへの明瞭な方向性は未だ獲得されていなかったことが指摘されている。敷地内には民家が残っており、式典において慰霊碑北側には幔幕が張られていた(参考文献1)。

注49) 前掲、注8、p43。慰霊施設を要項に含まない競技設計までの、慰霊に関する大まかな流れは次の通り。丹下は1946年の調査の後、1947年に、後の平和記念公園に市庁舎を移すことを提案しているが、当時はこの地に慰霊堂を中心としたモニュメントを建設しようとする動きが強く、旧市庁舎の利用も決定し実現しない。丹下は慰霊堂と平和記念公園の建設準備が本格化する1948年に再度、市長から諮問を受けており、その際にこの公園は「平和を作りだすための工場」であるべきで記念塔のようなものは必要ないとしながら、やはりささやかな慰霊・祈念のための何かが広島の人々のために必要という答えを出している。最終的に、競技設計の要項に慰霊は含まれない。丹下らは慰霊碑(平和記念アーチ頂点真下)を含む応募案を提出し、1950年模型・図面ではこれに慰霊室(平和記念アーチ東の足下外側の口の字型建物)が加えられるが、慰霊室はアーチと同様に実現しない。

競技設計応募案では慰霊碑のみが示され、模型写真と総合公園計画では慰霊碑に加えて慰霊室が示され、設計方針の説明では慰霊堂という言葉が使用される等、当時の名称使用自体に混乱が見られる。

注50) 前掲、注34

注51) 鼓型の東西の園路は1952年公園平面図と似ているが、東西ともに南部分に、園路で緩やかに囲まれた広がりをつくる構成に変化している。

注52) 前掲、注20／また丹下は浜井信三市長が選挙に敗れ、渡辺忠雄市長が市政を担った1955-1959年の4年間は全く市と交渉がなかったとしており、平和の池の設置に関与していないと思われる(前掲、注17、p93)。

注53) 前掲、注20。平和の灯の建立者は「平和の灯建設委員会」であるが、当時の核兵器禁止平和建設国民会議がこの委員会を設置しており、委員

会設置前から丹下に設計を依頼していた。次の著作に建設の経緯が報告されている。／核兵器禁止平和建設国民会議：核兵器廃絶と恒久平和を求めて：核禁会議30年史、核兵器禁止平和建設国民会議、1996

注54) 前掲、注20。噴水池の正式名称は「祈りの泉」。

注55) 広島市：平和記念施設保存・整備方針、資料編4平和記念施設の保存・整備に係る過去理念・議論、2006.3／既に28の慰霊碑が設置されており、聖地の印象を損なうとされる。

注56) 平和記念大通りを主な対象として1957年から大規模な供木運動が展開されており、平和記念公園にも植樹が行われた。また糸杉は刈り込みに強く萌芽力が高いが、植樹が実現したとしても、維持管理にも大きな問題があったと考えられる。

注57) 「広島計画その後」1963.9、前掲、注17、p93所収／資料館〔陳列館〕南には、1964年の噴水池以前に円形の池があり、この形については、どうにも調子が悪いと苦言を呈している。

注58) また丹下は、戦後の広島市における都市計画関係の行政は、セクションリズムを超え総合的・横断的な取り組みを目指した珍しい例であるとしている(前掲、注15)。また、実施においては慰霊碑をめぐる問題の他、公会堂の実施設計に関する問題が深刻で、雑誌等においても繰り返し取り上げられている(注25が関連)。公園整備に関する批判・反省としては、担当者の一人であった浅田孝の次のもののみが確認できた。「現在の園地そのものの設計は市で行われ、われわれのイメージとはまるで程遠い・・・全体の造園設計もわれわれの手で推し進めるべきであったとくやまれる」。浅田孝：広島平和記念公園および記念館、建築雑誌、81(974)、p611、1966.11

注59) 注26,27参照。

注60) 石種は花崗岩または安山岩が指定されている。

注61) このほかの提案として、(3)原爆ドーム広場の整備では、駐車場等の撤去が、(4)では、鼓型内部を人の場所として歩車分離を徹底すること、大通りから立ち上げた1.4mの高低差を利用した設備諸室の設置が提案されている。(6)はこの他、未舗装園路の舗装と樹木下の豆砂利敷、灌木の公園外周部への移植、屋外照明計画、緑地帯の柵の撤去と危険防止柵の灌木への変更、およびベンチ、案内板等への提案である。

注62) 児玉克哉編：世紀を超えて：爆心復元運動とヒロシマの思想、中国新聞社、1995／市民、NHK、広島大学原爆放射能医学研究所(原医研)、広島市による爆心復元運動は、被爆時に実際にそこにあった町、地域社会、人々、家族が具体的にどのようなものであったかを「復元地図」の中に具体的に定着させようとするもので、1966年8月3日NHK広島『カメラリポート・爆心半径500メートル』の放送を端緒としている。経済的な成長・発展の一方で、世界は核の緊張下にあった。被爆20年を迎えた広島においては、被爆の調査・記録が不十分なまま、被爆者の高齢化が進み、事実の風化が強く懸念されていた。

注63) 長屋龍人は当時NHK番組ディレクターで、丹下との面談の様子を記している。前掲、注62、p. 85、pp. 142-144。丹下へは2案提案されており、もう一つは資料館〔陳列館〕の天井・壁を亡くなった20万人の顔で覆うというものである。提案からの直接の関連は不明であるが、現在、国立広島原爆死没者追悼平和祈念館で類似の取り組みが行われている。

注64) 前掲、注5、p22。この前段に「当時の広島は「70年間草木も生えない」と言われていた。それは、二度と起こってはならない不幸な出来事によって、生命をもつあらゆるものの前から、この地が永遠に消え去ることを意味していた。」とある。

図版出典

図1：「中央図書館移管平和公園模型写真」、広島市公文書館所蔵、トリミングの上、加筆。施設名称は本文中で統一して使用する名称を表記。

図2・図3：広島平和公園競技設計応募作品、広島市公文書館所蔵、藤本千万太資料、配置図・鳥瞰図。図中文字を記載の上、[]内に本文中の名称を表記。鳥瞰図(部分)はトリミングの上加筆。

図4：『国際建築』(注13)より転載の上、同誌記載の施設名称を加筆

図5：参考文献2より転載の上、同図面の施設名称を加筆、()内は説明。

図6：『丹下健三：伝統と創造』(注4)より転載。

図7：『概観 広島市史』(注24)より転載の上、加筆。

図8：中国新聞社編：被爆30年写真集：ヒロシマの記録、中国新聞社、1975より転載の上、加筆。

図9：『調査報告書』(注6、広島市公文書館所蔵)より転載の上、図中文字を加筆、()内は説明。

THE LANDSCAPE DESIGN IN HIROSHIMA PEACE MEMORIAL PARK

The transition of the design by Kenzo Tange

Rie MAKI^{*1} and *Tomoko NIIHATA*^{*2}

^{*1} Assoc. Prof., Hiroshima Jogakuin Univ., Dr.Eng.

^{*2} Pacific Consultants Co., Ltd., P.E.Jp

This paper aims to clarify the transition and the characteristics of the landscape design by Kenzo Tange in Hiroshima Peace Memorial Park through investigation of the drawings and the descriptions of the park published in magazines and collections of his works, and the historical materials owned by the Hiroshima City Archives.

Tange's plan, proposed in the architectural design competition held in 1949, is very famous for the idea that the principle axis oriented north and south through the park crosses at right angles with the axis oriented east and west along Peace Boulevard. Both the Peace Arch and the piloti of the Peace Memorial Museum open onto the north-south axis and divide the expanse from the Peace Boulevard to the Atomic Bomb Dome into 3 parts (forecourt, the Peace Square, and the area of memorial trees). The A-Bomb Dome appears as the focal point in the view along the axis. The creation of monumentality with an invisible axis not depending on massive objects in the park is esteemed as his original and excellent design.

His design work continued from 1949 to 1955 when the construction had finished, and in the 1970's he proposed a new plan to solve problems which had been caused by postwar shortages in the supply of construction materials. We examined the proposals he made in each period, focusing on the treatment of the principal axis and how the park was designed to both commemorate the victims of atomic bomb and promote peace.

His plan, drawn in 1949, included a detailed landscape design. The Peace Square was covered with turf and the memorial trees, planted in a grid, were pruned cypresses. The central hourglass shaped stretch was flanked by evergreen trees on the eastern and western parts of the stretch. There were also several paths lined with deciduous trees or pine trees along the river. The original plan for the Memorial Arch was cancelled and the Memorial Cenotaph designed by Tange was aligned to frame the A-Bomb Dome in 1952. The plan drawn in 1952 shows long and narrow flowerbeds on the principal axis in the northern part.

Tange's original plan for a grid of memorial cypress trees was not realized when the planting was eventually carried out. In the 1960's the Peace Flame and the Peace Pond were aligned on the axis to the north of the cenotaph. In the 1970's, Tange proposed some ideas to improve the park. The primary idea was to pave the whole hourglass stretch with stones to show the atomic bombed town map as it had been at the time of the bombing. He also presented the idea to extend the Peace Pond to the river.

Regarding the principal axis, we clarified that the concept of the invisible axis became obscure when the cenotaph was built. The concept in his 1970's proposal indicated that the initial idea of an invisible axis was realized in southern part of the park and on the other hand the visible axis was distinctly shown as the extended Peace Pond.

Regarding the function of the park to promote peace, we clarified that the original plan called for different purposes for the northern and southern parts of the park: The northern part was to commemorate the victims whereas the southern part would promote peace, but these separated functions overlapped in an unrealized redesign proposal which would have put markers indicating property boundaries of the obliterated buildings that had previously stood in the center of the park, and also in the view from the cenotaph.

(2017年7月31日原稿受理, 2018年2月22日採用決定)